

[B年] 公現後第7日(2023年2月19日)

【旧約聖書日課】 イザヤ書 41章8～16節

- 8 わたしの僕イスラエルよ。  
わたしの選んだヤコブよ。  
わたしの愛する友アブラハムの末よ。
- 9 わたしはあなたを固くとらえ  
地の果て、その隅々から呼び出して言った。  
あなたはわたしの僕  
わたしはあなたを選び、決して見捨てない。
- 10 恐れることはない、  
わたしはあなたと共にいる神。  
たじろぐな、わたしはあなたの神。  
勢いを与えてあなたを助け  
わたしの救いの右の手であなたを支える。
- 11 見よ、あなたに対して怒りを燃やす者は皆  
恥を受け、辱められ  
争う者は滅ぼされ、無に等しくなる。
- 12 争いを仕掛ける者は捜しても見いだせず  
戦いを挑む者は無に帰し、むなしくなる。
- 13 わたしは主、あなたの神。  
あなたの右の手を固く取って言う  
恐れるな、わたしはあなたを助ける、と。
- 14 あなたを贖う方、イスラエルの聖なる神  
主は言われる。  
恐れるな、虫けらのようなヤコブよ  
イスラエルの人々よ、  
わたしはあなたを助ける。
- 15 見よ、わたしはあなたを打穀機とする  
新しく、鋭く、多くの刃をつけた打穀機と。  
あなたは山々を踏み砕き、丘をもみ殻とする。
- 16 あなたがそれをあおると、風が巻き上げ  
嵐がそれを散らす。  
あなたは主によって喜び躍り  
イスラエルの聖なる神によって誇る。

【使徒書日課】 使徒言行録 28章1～6節

1 わたしたちが助かったとき、この島がマルタ  
と呼ばれていることが分かった。2 島の住民は大  
変親切にしてくれた。降る雨と寒さをしのぐた  
めにたき火をたいて、わたしたち一同をもてな  
してくれたのである。3 パウロが一束の枯れ枝を

集めて火にくべると、一匹の蝮が熱気のために  
出て来て、その手に絡みついた。4 住民は彼の手  
にぶら下がっているこの生き物を見て、互いに  
言った。「この人はきっと人殺しにちがいない。  
海では助かったが、『正義の女神』はこの人を  
生かしておかないのだ。」5 ところが、パウロは  
その生き物を火の中に振り落とし、何の害も受  
けなかった。6 体ははれ上がるか、あるいは急に  
倒れて死ぬだろうと、彼らはパウロの様子をう  
かがっていた。しかし、いつまでたっても何も  
起こらないのを見て、考えを変え、「この人は  
神様だ」と言った。

【福音書日課】 ルカによる福音書 9章10～17節

10 使徒たちは帰って来て、自分たちの行った  
ことをみなイエスに告げた。イエスは彼らを連  
れ、自分たちだけでベトサイダという町に退か  
れた。11 群衆はそのことを知ってイエスの後を  
追った。イエスはこの人々を迎え、神の国につ  
いて語り、治療の必要な人々をいやしておられ  
た。12 日が傾きかけたので、十二人はそばに来て  
イエスに言った。「群衆を解散させてください。  
そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、  
食べ物を見つけるでしょう。わたしたちはこん  
な人里離れた所にいるのです。」13 しかし、イエ  
スは言われた。「あなたがたが彼らに食べ物を  
与えなさい。」彼らは言った。「わたしたち  
にはパン五つと魚二匹しかありません、このすべ  
ての人々のために、わたしたちが食べ物を買  
いに行かないかぎり。」14 というのは、男が五千人  
ほどいたからである。イエスは弟子たちに、  
「人々を五十人ぐらいつづ組にして座らせな  
さい」と言われた。15 弟子たちは、そのようにして  
皆を座らせた。16 すると、イエスは五つのパンと  
二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために  
賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては  
群衆に配らせた。17 すべての人が食べて満腹し  
た。そして、残ったパンの屑を集めると、十二  
籠もあった。

## 「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

## イザヤ書 41章8～16節

- <sup>8</sup> しかし、イスラエルよ、あなたは私の僕  
私が選んだヤコブ  
私の友アブラハムの子孫。
- <sup>9</sup> 私はあなたを地の果てから連れ出し  
その隅々から呼び出して言った。  
「あなたは私の僕。  
私はあなたを選び、拒まなかった」と。
- <sup>10</sup> 恐れるな、私があるあなたと共にいる。  
たじろぐな、私があるあなたの神である。  
私はあなたを奮い立たせ、助け  
私の勝利の右手で支える。
- <sup>11</sup> 見よ、あなたに対して激怒する者は皆  
恥じ入り、辱められ  
あなたと争う者たちは無に等しくなり、  
滅びる。
- <sup>12</sup> あなたと言ひ争う者は探しても見つからず  
あなたと戦う人々は無に等しく、  
全く消えうせる。
- <sup>13</sup> 私は主、あなたの神。  
あなたの右手を取って  
「恐れるな、私があるあなたを助ける」と言う。
- <sup>14</sup> 恐れるな、虫けらのようなヤコブ  
イスラエルの人々よ。  
私はあなたを助ける——主の仰せ。  
あなたの贖い主はイスラエルの聖なる方。
- <sup>15</sup> 見よ、私はあなたを  
新しく鋭い歯の付いた打穀板とする。  
あなたは山々を踏みつけて砕き  
丘をもみ殻のようにする。
- <sup>16</sup> あなたがそれらをふるい分ければ、風が運び  
暴風がまき散らす。  
あなたは主によって喜び躍り  
イスラエルの聖なる方を誇る。

## 使徒言行録 28章1～6節

<sup>1</sup> 私たちが助かったとき、この島がマルタと呼  
ばれていることが分かった。<sup>2</sup> 島の住民は大変親  
切にしてくれた。雨が降り出して寒かったので、  
たき火をたいて、私たち一同を迎えてくれたの

である。<sup>3</sup> パウロが一束の枯れ枝を集めて火にく  
べると、一匹の毒蛇〔直訳→獣〕が熱気のため  
に出て来て、その手に絡みついた。<sup>4</sup> 住民は彼の  
手に蛇がぶら下がっているのを見て、互いに言  
った。「この人は人殺しに違いない。海では助  
かったが、正義の女神はこの人を生かしてはお  
かないのだ。」<sup>5</sup> ところが、パウロはその蛇を火  
の中に振り落とし、何の害も受けなかった。<sup>6</sup> 体  
が腫れ上がるか、あるいは突然倒れて死ぬだろ  
うと、彼らはパウロの様子をうかがっていた。  
しかし、いつまで待っても何も起こらないのを見  
て、考えを変え、「この人は神様だ」と言っ  
た。

## ルカによる福音書 9章10～17節

<sup>10</sup> 使徒たちは帰って来て、自分たちの行った  
ことをみなイエスに告げた。イエスは彼らを連  
れ、自分たちだけでベトサイダという町へ退か  
れた。<sup>11</sup> 群衆はこれを知って、イエスの後を追っ  
た。イエスはこの人々を迎え、神の国について  
語り、治療の必要な人々を癒やされた。<sup>12</sup> 日が傾  
きかけたので、十二人は御もとに来て言った。  
「群衆を解散し、周りの村や里に行き宿をと  
り、食料を調達するようにさせてください。私  
たちはこんな寂しい所にいるのです。」<sup>13</sup> しかし、  
イエスは言われた。「あなたがたの手で食べ物  
をあげなさい。」彼らは言った。「私たちには、  
パン五つと魚二匹しかありません、まさか、私  
たちが、この民みんなのために食べ物を買いに  
行かないかぎり。」<sup>14</sup> というのは、五千人ほどの  
人（別訳→男）がいたからである。イエスは弟  
子たちに、「人々をおよそ五十人ずつひとまと  
まりにして座らせなさい」と言われた。<sup>15</sup> 弟子た  
ちは、そのようにして皆を座らせた。<sup>16</sup> すると、  
イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰  
いで、それを祝福して裂き、弟子たちに渡して  
は群衆に配らせた。<sup>17</sup> 人々は皆、食べて満腹した。  
そして、余ったパン切れを集めると、十二籠あ  
った。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・2月19日「公現後第7主日」の日課主題は「奇跡を行うキリスト」。この日は、「公現後」または「降誕節」の期節の最後の主日で、この週の水曜日(灰の水曜日)から「受難節」が始まる。

・この日、石神井教会は「創立記念」の主日であるが、礼拝の聖書朗読箇所は主日聖書日課に従う。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、イスラエルに対する救いの約束が宣言される箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、パウロらが乗せられたローマ行きの船が難破し漂着したマルタ島での出来事を伝える箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスが五千人の人々にパンと魚を分け与えられた逸話を伝える箇所。

**旧約日課(イザヤ 41 章より)**

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典「後の預言者」の第一に置かれた預言書。「預言者イザヤ」は、正典「律法と預言者」の編纂に携わった集団(祭司預言者?)が師父と位置づける預言者で、「預言者エレミヤ」や「預言者エゼキエル」らを通してバビロン捕囚期にその位置づけが明確にされたものと推察される。歴史的な「預言者イザヤ」は、前8世紀末、南王国ユダの四代の王(ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ)に宮廷預言者として仕えた。本預言書1~39章は、宮廷預言者としてその活動が記録された「預言者イザヤの預言の書」を元にまとめられていると考えられる。一方、40章以下は、バビロン捕囚期以降の時代に「イザヤ」を師父とする祭司預言者集団によって告げられた預言の集成と考えられている。日課箇所は、後者に相当する。

・日課箇所を含む本預言書40章以下は、前6世紀中葉にペルシアのキュロス王が登場してバビロニアの覇権が崩れ、新しくペルシア帝国支配が始まる時代を背景としている。前7世紀終盤に台頭してきたバビロニア帝国に対して、南王国ユダのヨシヤ王は同盟関係を取り、バビロニア・メディアを中心とした反アッシリア・エジプト連合に加担した。ヨシヤ王自身はエジプト軍との戦闘で戦死し、その後南王国にエジプト傀儡政権をもたらすことになるが、前598年の第一次バビロン捕囚、前597年のエルサレム陥落・王国滅亡にもかかわらず、バビロンに移住させられたダビデ王家を中心とする王侯貴族、祭司集団、また周辺ユダヤ人は、同地で親バビロニア派としての厚遇を受け、一大コミュニティを形成するに至った。その後、バビロニア帝国はペルシア王キュロスによって滅亡させられ、諸国からバビロンに移住させられていた捕囚民の帰還事業が進められた。この帰還事業自体は、ペルシア帝国の統治方策に基づいたことであったが、ユダの人々の中にこれを「神の計画」として位置づけ、宗教原理に基づいて「ユダヤ共同体の再建」を目指す者たちが、神殿再建、正典編纂を進めていった。

・日課箇所は、上述のような背景の中で「ユダヤ共同体再建事業」への参画を呼びかける預言として告げられたと考えられる。実際には、多くのユダの人々は、すでにバビロンの地に形成されたコミュニティに拠点を築いてきていたし、エジプトをはじめとする他の地に亡命していた者たちもそれぞれの地で生活の拠点を築いていたので、ユダの地に帰還して「再建事業」に参画しようとする者は多くなかったのだろう。ペルシア帝国という覇権国家の中であって、かつての南王国を形成していた「ユダとベニヤミンの人々」および「祭司・レビ人」は、もちろん帝国の覇権に対抗するような勢力とはなり得なかった。そこで強調されることになったのが、「ヤコブ」や「イスラエル」というより古いルーツを共有する(とヨシヤ王時代以降、主張されることになっていた)「大イスラエル」の集結という思想である。「エズラ記・ネヘミヤ記」や「歴代誌」が考える排他的な「ダビデ王家・ユダ族至上主義」と異なり、「イザヤ書」は、アブラハムにまで遡る共通の祖をルーツとする「大イスラエル」の団結を訴えているのである。

**使徒書日課(使徒 28 章より)**

・「使徒言行録」は、「ルカによる福音書」と共に「ルカ文書」と呼ばれ、「福音書」の続編として編纂されている。その内容は、「初代教会正史」であるが、その時代の出来事を網羅的に扱うというよりも、第三世代以降の諸教会共同体に向けて、共通のルーツ(主イエスの証人としての使徒に連なる)を確かめ、多様な展開にもかかわらず一致した教会共同体としての営みを方向づけられていることを示そうとするものとなっている。そのために取り上げられるのは、初期の「使徒ペトロ」を核とした活動と、それに続く「パウロ」らの活動に限定されている。「パウロ」が取り上げられるのは、「ルカ文書」の著者自身がパウロに近い人物であったこと、また、「使徒ペトロ」との間でパウロが調停的な教会共同体形成に舵を切ったことを象徴的な展開として位置づけていたからであろう。

・日課箇所は、パウロが皇帝の裁判を受けるためにローマに移送される途中、乗船した船が難破して漂着したマルタ島での逸話として物語られている(1節は、厳密には、「この島がメリテと呼ばれていることがわかった」とあり、当時のマルタ島内の最大都市の名が挙げられている。あるいは、「メリテ島」と呼ばれていた別の島を指している可能性も否定できない)。この島は、1世紀当時、ローマ帝国の支配下にあったが、一定の自治が認められていたという。2節「住民」は「バルバロイ」の訳で、原意は「野蛮人」つまり、ギリシア人の立場から言えば「非ギリシア人」、ローマ人の立場から言えば「非ローマ市民」。

・4節「正義の女神」は「ディケー」で、ギリシア神話の「ホーラー—三女神」の一人。「時」の秩序を司るものとされていた。パウロは、かつて「リストラ」の地でも人々から「神々の降臨」とみなされて「ヘルメス」と呼ばれたことが伝えられている(使徒 14:11~12)。

## 福音書日課(ルカ9章より)

・日課箇所は、「五千人の食事」の逸話伝承を伝える箇所。この逸話は、四福音書が共通して伝えている(マタイ14章、マルコ6章、ヨハネ6章)。マルコとルカは、この逸話の発端を、二人一組で派遣されていた弟子たちが帰ってきてその活動を報告したことを受け、休息を与えるために訪れた地でのこととして描いている。一方で、マタイとヨハネは、主イエスご自身が人々から離れるために向かわれた地でのこととして描いている。

・ルカがこの出来事の地として明示している「ベトサイダ」は、ヨハネ福音書が「ペトロとアンデレ」および「フィリポ」の出身地として示している町の名。この町の名はアラム語で「漁師の家」という意味で、おそらく漁師たちが拠点としていた集落だったのだろう。この地が、逸話の中の対話では「人里離れた所(エレモス)」と言われているが、これは、実際に「人里離れた所」での出来事であったというだけでなく、主イエスが誘惑を受けられた「荒れ野(エレモス)」を示唆するために描き入れられた表現であろう。主イエスが「荒れ野」で試みを受けられたように、弟子たちも「人里離れた所」で試みを受けている、ということ。

・四福音書が共通して伝えているように、この逸話では、弟子たちが群衆を解散させ、各自が自分の食事を得るようにさせようと提案するのに対して、主イエスは、弟子たちに「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と命じられている。にもかかわらず、結局のところ、その食べ物は主イエスの手から与えられたものとして描かれる。弟子たちは、その主イエスの手から与えられたパンと魚を人々に配る役回りをするのみである。これでは、主イエスが弟子たちの前から去られた(昇天された)後はどうするのか、という疑問が生ずるが、この逸話の終わりに多くの「残ったパン屑」の存在が示されることによって、弟子たちは、これを再び主イエスから与えられたパンとして人々に配り渡すことができ、ということが示唆されることになっている。

## 来週の誕生日 (2月19日~25日)

## 主日礼拝の讃美歌から

・21-351番「聖なる聖なる」(=□12番、I66番)は、19世紀初頭に英国教会司祭として詩作に活躍したR・ヒーバーが「三位一体主日」のために作詞。曲は、この歌詞のために19世紀に教会音楽家として活躍した英国教会司祭J・B・ダイクが作曲し、「NICAEA(ニケア)」の曲名が付されている。

・21-390番「主は教会の基となり」は、19世紀英国教会司祭 S.J.ストーンが牧会教育上の必要から信仰告白「教会はキリストの体にして、恵みにより召されたる者の集い」に焦点を当てて作詞。曲は、C.ウェスレーの孫で19世紀英国教会のオルガニストとして活躍したサミュエル・S・ウェスレー(チャールズ・ウェスレーの孫)が「黄金の都エルサレム(Jerusalem

the Golden / Urbs Sion aurea)の歌詞に合わせて作曲したもの。21-101番も同曲。

・21-18番「心を高くあげよ！」(=II1)は、コロサイ3:1~4に基づく伝統的な聖餐祈禱冒頭の「スルスム・コルダ SURSUM CORDA」(「心を高く上げなさい」との呼びかけに対して、「わたしたちは心を高く上げます」と応答)に基づく讃美。作詞者バトラーは19世紀英国教会の司祭で、自分が校長として勤める学校の讃美歌集のために作詞。作曲者スミスは20世紀米国聖公会の司祭。

## 21-351「聖なる聖なる」

*Holy, Holy, Holy, Lord God Almighty*

1. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / Early in the morning our song shall rise to thee. / Holy, holy, holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed Trinity!
2. Holy, holy, holy! All the saints adore thee, / casting down their golden crowns around the glassy sea; / cherubim and seraphim falling down before thee, / which wert, and art, and evermore shalt be.
3. Holy, holy, holy! Though the darkness hide thee, / though the eye of sinful man thy glory may not see, / only thou art holy; there is none beside thee, / perfect in power, in love and purity.
4. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / All thy works shall praise thy name, in earth and sky and sea. / Holy, holy, holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed Trinity.

## 21-390「主は教会の基となり」

*The Church's one foundation*

1. The Church's one foundation / Is Jesus Christ, her Lord; / She is his new creation / By water and the Word. / From heav'n He came and sought her / To be his holy bride; / With his own blood he bought her, / And for her life he died.
2. Elect from every nation, / Yet one o'er all the earth; / Her charter of salvation: / One Lord, one faith, one birth. / One holy name she blesses, / Partakes one holy food, / And to one hope she presses / With ev'ry grace ended.
3. Through toil and tribulation / And tumult of her war / She waits the consummation / Of peace forevermore / Till with the vision glorious / Her longing eyes are blest, / And the great Church victorious / Shall be the Church at rest.
4. Yet she on earth has union / With God, the Three in One, / And mystic sweet communion / With those whose rest is won. / O blessed heav'nly chorus! / Lord, save us be your grace / That we, like saints before us, / May see you face to face.

## 21-18「心を高くあげよ！」

*Lift Up Your Hearts! We Lift them, Lord, to Thee*

1. 'Lift up your hearts!' We lift them, Lord, to thee; / here at thy feet none other may we see: / 'lift up your hearts!' E'en so, with one accord, / we lift them up, we lift them to the Lord.
2. Above the level of the former years, / the mire of sin, the slough of guilty fears, / the mist of doubt, the blight of love's decay, / O Lord of light, lift all our hearts to-day.
3. Above the swamps of subterfuge and shame, / the deeds, the thoughts, that honour may not name, / the halting tongue that dares not tell the whole, / O Lord of truth, lift every Christian soul.
4. Lift every gift that thou thyself hast given: / low lies the best till lifted up to heaven; / low lie the bounding heart, the teeming brain, / till, sent from God, they mount to God again.
5. Then, as the trumpet-call in after years, / 'Lift up your hearts!' rings pealing in our ears, / still shall those hearts respond with full accord, / 'We lift them up, we lift them to the Lord!'